

二〇二二年度

中等部入学試験問題

国語（60分間）

【注意】

- 1 問題は、一と二です。
- 2 解答は、すべて別紙の解答用紙に記入しなさい。

【注意】 受験番号は、算用数字で横書きにすること。

受 験 番 号				

氏 名

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合上、本文を変えた部分がある。また、あらかじめ段落分けがしてあり、《1》《3》は意味段落を示す）。

信吾や有一と彰浩が野球漬けで過ごした中学も、去年、統廃合の波をかぶり、幕を閉じた。そして、現在、彰浩たちが通っている高校も来年の三月で廃校になることが決定している。

《1》「信吾」

「なんや？」

「ランニングまだしてねえだろうが。三塁打はもうええから、さっさと走ってこい」

「えー、ちょっとかったるいな」

「あほ。走るのは、基本の基本やぞ」

信吾の背中を強く叩く。信吾は大げさな悲鳴をあげて顔を歪め、そのままの表情でグラウンドを周り始めた。彰浩は、足元のミットを拾い上げる。

「有一、ほら」

マウンドに向けて、顎をしゃくる。黙したまま有一は、立ち上がった。脇にグラブを挟み、一步一步踏みしめるようにして、マウンドへと歩いていく。有一はいつもそうだった。ピッチャーとして立つ場所まで、誰の目にも映らない一本の線が確かに引かれていて、そこを辿りながらでないとマウンドには上がれない。それを身体で証明しようとするかのように、ゆつくりと一足ずつ進んでいく。そしてマウンドの上で深く身体を折り手のひらを投手板の上に押し当てる。単なる癖なのか、有一なりの儀式なのかわからない。練習のときも、試合のときも同じだった。

有一が身を屈めるのを見てから、彰浩はミットをはめた。長兄が高校入学の祝いにと送ってくれたものだ。携帯電話とミットとどちらにするかと問われ、躊躇なくミットと答えた。高級品ではないけれど、使い込み、手入れを怠らず大切にしてきたから、彰浩の手にしつくりと馴染んでくる。

「よし、有一、ええぞ」

マウンドで有一がわずかに頷いた。きれいなオーバースローのフォームから球が放たれる。ミットに重い手応えがくる。

有一はなぜ

1

たのだろうかと、球を受ける度に思ってしまう。

この一球であれば、この一球を磨けば、甲子園は射程内ではなかったのか。有一の抱えている事情はいまだに、よく知らない。けれど、稲生の家自体は旧家でかなりの資産家でもあった。田舎の中学校とはいえ、有一の成績も学年トップに近かった。彰浩たちとは違い、望めば都市部の私立校でも入れる立場だったはずだ。

「そりゃあ、ユウミたいにしゃべらんかったら面接で、落とされるやないか」と、信吾は事もなげに言うけれど、彰浩はそうは思わなかった。寡黙であつても、それは投手としての有一の力をソコなうものではない。実際に有一の球を受けてみれば、わかる。この球なら、甲子園の常連校でも通用するだろう。有一さえその気なら、甲子園のマウンドはまんざら夢ではなかったのと思う。「おまえ、なんで地元に残ったんじゃ」高校に入学してすぐ、尋ねたことがある。有一は他人事のように首を傾け、曖昧に笑っただけだった。

「うつへえ、行くぞーっどどーん」

奇妙な叫び声をあげて、信吾がホームベースめがけて滑り込んでくる。彰浩は、有一の一球をくわえ込んだミットで信吾の頭を思いつき叩いた。

「アウト！」

信吾が頭を抱えて、転がる。そのままうつ伏せになった。

「くっそう。悔しいよう」

こぶしで地を叩く。

「悔しかったら、もうちょいまともなスライディングせえや」

もう一度軽く、今度は尻のあたりを叩く。

「ほら、もう一度やってみいや。ダイヤモンド一周、華麗なる本塁突入のスライディング」

「うへへっいつ」

奇声を発し、信吾は起き上がり、そのまま大きく伸びをした。

「悪いけど、おれ、そろそろ帰るわ」

日はまだ中天にある。彰浩はわずかに目を細めてみた。

「どうした？ 何かあったんか？」

「別に。三年やし、ちつとは勉強しよかて思うてな」

「は？ ふざけんなや。おまえが勉強するなら、うちのアニメだって問題集を広げてるぞ」

「おいおい、猫と一緒にかよ。しかも、でぶでぶのばあさん猫だぜ。悲し過ぎて涙も出んわ。まっ、とにかく今日はここまでにするってことで。じゃあな」

ひらりと手を振って、信吾は駆け出した。

「おい、信吾、待てよ」

声をかけたけれど振り向かなかった。一定のリズムで走り、駐輪場の陰に消えて行く。

三人しかいないのだから、野球の練習と呼べるものなどできはしない。それでも午前中に集まり、二時間近く走って、投げて、バットを振って、汗を流す。それが緩やかな決まり事となっていた。

彰浩も、有一も、信吾も個々の思いや事情を抱いて、諦めたものも捨てざるをえなかったものも数多ある。それでも、ぎりぎり自分たちなりの野球をしようという暗黙の了解が存在していたし、了解のもとに、今日も集まっていたのだ。練習を切り上げるのは、一時間以上早過ぎる。

「なんだ、あいつ」

舌打ちしてみる。

「信吾……病院じゃないか……」

マウンドから降りてきた有一が呟いた。ため息みたいな小さな声だった。有一の声はすぐに紛れる。風や物音や他人の声に紛れ、きれぎれになり、消えてしまう。どこか儚い印象は、まだ有一に纏わり付いていた。

「病院？」

「うん……おふくろさんが入院したって……」

「え？ ほんまか？」

「たぶん……ばあちゃんが、そう言うてたから……」

「おふくろさんが入院で、そしたら、今、一人か……」

信吾は、早くに父親が亡くなり母親と二人暮らしのはずだ。

信吾の姿が消えた駐輪場に視線を巡らす。そこは、ただひっそりと暗い場所で、彰浩の目には淡い闇以外、何も捉えられなかった。

《2》その夜、警察から電話があったのは十時近かった。テレビを見ていた。今日から甲子園では選抜大会が始まっていたのだ。昨年のヒット曲を行進用にアレンジした軽快な音楽が響き、選手たちが誇らしげでもあり、どこかこちなさも感じる表情で歩いている。その姿を見るときもなしに見ていた。本当は見たくなかった。たとえスポーツニュースの中のほんの短い時間であつても見たくない。父が熱心にテレビ画面を見つめていなければ、すぐにでも消していただろう。そこまでしなくても、立ち上がりさつさと自室にこもればいいのだ。

なのに、彰浩は視野の片隅にテレビ画面を、聴覚の一部で選手宣誓やスタンドのどよめきをしっかりと捉えていた。それらを振り切つてしかめ面のまま居間を出て行くことに少し抵抗があった。どうにもならないことに拘つて、こそこそ逃げ出そうとする自分が卑小で哀れな者に思える。自分で自分を哀れみそうで怖い。

しかし、それでも、やはり、拘ってしまう。

自分には決して手の届かない場所を堂々と歩いているのは同年代の少年たちだ。力及ばず届かなかったのならまだしも、挑むことさえ許されなかった。同じ国に生まれ、同じ年齢でありながら、自分と彼らの間には無限にも思える隔た

りがある。

5 「ほんま、格差社会やなあ」

ほろりと言葉が零れた。父がテレビの前から振り返り、なんだ？ と問う代わりに、瞬きをする。画面が変わり、女

子ゴルフの顔が大きく映し出されたのを潮に彰浩は腰をあげた。老猫のアニメが遠慮のない欠伸を漏らす。電話が鳴ったのはそのときだ。由美子が出た。

「はい、もしもし、安高ですが……は？ 警察？」

由美子の横顔から血の気が引いていくのが、はっきりと見て取れた。父も腰を浮かす。二人の兄のどちらかに何事かが起こったのかと、彰浩は大きく息を吸い込んだ。別に運命論者ではないけれど、不運とか不幸とかいうやつは群れて来るような気がしてならない。水の流れに似て低いところに集まってくる。これでもか、これでもかというぐらい。

「え？ まあ、……信吾ちゃんか」

由美子の丸い身体が、わずかに前に屈み込む。

信吾？

「はい……はい……わかりました。すぐに……はい三、四十分ほどで、うかがえますので……はい、あの、信吾ちゃんの様子は……ああ、そうですか、はい、では、すぐに」

「信吾がどないしたって？」

由美子が受話器を置くより早く、尋ねていた。口の中が妙に乾く。

「信吾に、何かあったんか？」

「うん、どうも……警察に捕まったみたいや」

「は？ まさか。何で……」

「よう、わからんけど。江草で喧嘩したとか」

江草は、西隣に位置する市だった。四十キロほど離れている。人口数万の小都市だが、近隣では唯一の市だ。入院設備のある総合病院もいくつかある。信吾の母の入院先もたぶん、江草なのだろう。そこまでは、わかる。けれど、そこから先は不明だった。信吾は陽気で調子に乗りやすい性格ではあるけれど、短気でも粗暴でもない。暴力に対して、臆病なところさえあった。不慮の事故に遭ったというならまだしも、喧嘩とは……。

「どういことなんだよ」

苛立ちがこみあげる。父が立ち上がった。

「ともかく、迎えに行かんとあかんじやろ」

落ち着けという眼つきで、彰浩を見やる。

「信吾が迎えに来てくれて、言うてるわけやろが」

「そう。布施さん入院しとるしね、うちしか頼るところ、なかったんやないんかな」

「ほな、早うに行つてやらんと。車のキー、出せや」

「あんたは行かんでよろし。うちと彰浩で行きます」

エプロンを脱ぎ捨てると由美子は、壁にかかったキーホルダーに手を伸ばした。

《3》由美子の運転する軽自動車の後部座席で信吾が小さく呻いた。

「痛いかな？」

尋ねた彰浩に、信吾は黙ってかぶりを振った。唇と目の下が、それとわかるほどに腫れている。

「まあ喧嘩といつても、

2 勢に

3 勢というか、向こうは五人もいたわけやし、大人やし、布施くんは一人やし

ね。どっちかという被害者みたいなところもあるから……けど、目撃者の話だと、先に手を出したのは布施くんらしいし、本人も認めているから、何にも無しで帰っていいよってわけには、いかんかってねえ」

②いかにオニコウそうな中年の警察官は、ひたすら頭を下げる由美子を前にして、猫背の姿をさらに丸くしていた。「はつきりとは言われなかったけど、学校へもナイショにしといてくれるみたいやで。大事にならんでよかったやないの」

由美子の声が車内に響く。信吾の隣で彰浩は、眉をひそめた。

「母さん、声が大きすぎ」

「あつそう。ごめんな、地声なもんやから」

「すいません」

口の中に負った傷のせいばかりではないだろう、信吾がぐもった声で詫びを言う。詫びなんていらぬ。聞きたい

ことは他にある。

「おまえ、何で喧嘩なんかしたんや？」

「うん……」

信吾はうんと言ったきり、黙り込んだ。

「言いとうないなら、ええけどな」

「あ……いや、道を歩いてたら向こうから、おっさん連中が来て……肩がぶつかったんや」

「うん、警察で聞いた。草野球のチームのおっさんたちやったんやろが。何か、試合の後で一杯やって酔っ払ってたつて。向こうがよろけて、ぶつかってきたんやろ」

「まあ、酒臭かったけど……ぶつかったやつが、舌打ちして『気をつけろ。イモが』って言うたんや、それで……」

「それだけか？」

信じられなかった。『気をつけろ。イモが』という一言は粗野でもあるし、侮蔑的でもある。ある者にとっては充分に喧嘩の因にもなりうるかもしれない。しかし、信吾がその一言だけで激昂したとは、とても思えなかった。信じられない。彰浩の視線を受け止めて、信吾が身じろぎする。

「電気店の前だったんや」

「え？」

「電気店の前で、テレビに甲子園が映ってた。今日、選抜やろ……別に、どうってことないけど……別にどうってことないのに、何か急にいらついて……そこに、ぶつかってこられて」

信吾が口をつぐむ。由美子が大きく息を吐いた。彰浩は座席に深く座り直し、こぶしを握った。存分に明るい陽光の下を誇らしげに歩くユニフォームの群れが浮かぶ。光は眩しく、空気は躍動していた。

挑むことさえ、許されなかった。

「信吾」

いつもよりゆつくりと丁寧に名前を呼んでみる。

「うん？」

「明日も練習、出てくれるか？」

返事の代わりに不鮮明な呻きが返ってきた。車が揺れ始める。山越えの道に入り、舗装が疎かになっているのだ。小刻みな振動に身体を委ね、彰浩はもう一度強く、こぶしを握り締めた。

(あさのあつこ「このグラウンドで」)

注1 「躊躇」……ためらうこと

注2 「寡黙」……口数が少ないこと

注3 「侮蔑」……見下しさげすむこと

注4 「激昂」……感情がひどく高ぶること

問1 ——線①「ソコなう」、②「オンコウ」のカタカナを漢字に直し、③「地声」の読みを書きなさい。

問2 ——線2「まんざら」の意味に近いものとしてもっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 絶対に イ ことさら ウ 本当に エ もしかしたら オ 必ずしも

問3 《2》の中に「謙譲語（へりくだることば）」がある。それをぬき出し、言い切りの形にして答えなさい。

問4 《3》の中に「体の一部」を使って人物の意志を示す表現がある。次の①、②の意味を示す表現についてそれぞれ本文中から八字以内でぬき出さない。

① 「否定」を表す動作

② 「不快」を表す動作

問5 《3》の 2・3 にそれぞれ漢字一字を入れると「相手が大人数なのに少人数では勝ち目がないこと」という意味のことばになる。当てはまる漢字を答えなさい。

問6 彰浩の野球に対する愛情が、毎日の習慣に反映し、それによってもたらされた成果が描かれた一文がある。《1》からぬき出し、最初の三字を答えなさい（句読点等の記号も一字とする）。

問7 —線1「この球なら、甲子園の常連校でも通用するだろう」は、彰浩がピッチャーとしての有一の力量を評価している部分である。これと対照的な思いを、彰浩が有一に感じている表現を四字でぬき出しなさい（句読点等の記号も一字とする）。

問8 1 にはどのようなことばが入るか。「高校」という語を必ず使って、十字で考えて答えなさい（句読点等の記号も含む）。

問9 —線3「暗黙の了解」とあるが、それを破ろうとする発言を《1》からぬき出し、最初の三字を答えなさい（句読点等の記号も一字とする）。

問10 《1》には次の一文がぬけている。次の一文が入る直前の五字をぬき出しなさい（句読点等の記号も一字とする）。しかし、今の声ははっきりと彰浩の耳に届いた。

問11 —線4「自分で自分を哀れみそうで怖い」とあるが、「自分で自分を哀れ」むとはどういうことか。この部分についての説明としてもっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 甲子園に出場している選手にも自分にも憎しみがわくこと。
- イ 自分たちが三人でやっている野球を、心の底から楽しめないでいること。
- ウ 自分が活躍できない原因が実は家族にあるという思いにとらわれていること。
- エ 甲子園に出ている選手たちの活躍や努力を素直に喜べないでいること。
- オ 有一や信吾を本当は信頼しきれていないこと。

問12 —線5「ほんま、格差社会やなあ」における彰浩の気持ちについて説明した次の文章の A に本文中から指定の字数でことばをぬき出し、それぞれ最初の三字を答えなさい（句読点等の記号も一字とする）。

- A（十三字） 自分たちとの間にある「格差」について、改めて実感した際のため息として解釈することができ
- B（十字） として受け止めている。このように甲子園とは彰浩にとって
- C（八字） として位置づけられている。

問13 —線6「電気店の前だったんや」と語り始めた理由について、次のように説明をした。 A

- D に当てはまるものを後のア～オから選び、記号で答えなさい。
- A が喧嘩をした理由を B に話し始めたのは、C の言動から、D は簡単に喧嘩をするような人間ではない」と自分のことを思ってくれている気持ちが伝わり、このまま黙っているわけにはいかな

- ア 彰浩
- イ 有一
- ウ 信吾
- エ 警官
- オ 由美子

問14 — 線7「信吾が口をつぐむ」とあるが、この部分についての説明としてふさわしくないものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 気持ちの整理がついていない自分をさらけ出すのは嫌だと思っている。

イ ここまで話したので、わかってほしいと思っている。

ウ 自分の悪事を話すことに気まずい思いをしている。

エ 喧嘩をした後なので、話すことが面倒になっている。

オ 自分の感情をうまく説明できなくなつて困惑している。

問15 — 線8「信吾」 いつもよりゆつくりと丁寧に名前を呼んでみる」とあるが、ここでの彰浩の気持ちとしてもっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちが力のある大人によつて都合よく動かされてしまう弱い存在であるということを感じ、空しさを信吾と分かち合おうという気持ち。

イ いらつきを爆発させてしまった信吾が妙に子どもっぽく思えて、父親のいない信吾に対して親代わりとして注意しようという気持ち。

ウ 甲子園に対する深い思いが全くなえられなかったとしても、他人に被害を与える行動をとることは許されないと信吾をさとする気持ち。

エ 父が早くに他界し、母親の看病を一人でしている中で、警察の世話になるような騒ぎを起こしてしまった信吾に同情し、なぐさめようという気持ち。

オ 甲子園に対する深い思いが、信吾にとつても同じように行動の規範になっている特別なものであることを確認しようとする気持ち。

問16 — 線9「明日も練習、出てこれるか?」、—— 線10「ごぶしを握り締めた」とあるが、この部分についての説明としてもっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 人に迷惑をかけた信吾を自分が鍛え直そうという思いと、自分たちの不幸な運命に対する怒り。

イ 罪の意識に苛まれて信吾に対する励ましと、未来への不安を断ち切ろうとする気合い。

ウ 今後一緒に野球を続けようという呼びかけと、苦しい状況ではあるが立ち向かいたいこうとする決意。

エ いらつく信吾を落ち着かせたいという思いと、心が揺れても決して泣くまいという意志。

オ 野球を続けられるのかという問い詰めと、運命に負けてしまった信吾に対する苛立ち。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合上、あらかじめ段落分けがしてあり、《1》～《4》は意味段落を示す）。

《1》現代は情報時代といわれます。マスコミの発達によって、われわれは多くの情報を知らされます。科学的な知識についても、新しい理論や発見が行なわれれば、マスコミはいち早くそれを報道し、われわれはそれをすぐ知ることができます。科学的知識の解説書にもこと欠きません。世界じゅうで起こる多くの出来事についてもわれわれはたちまちの間に、これを知ることができます。何しろ月世界での宇宙飛行士の活動を全世界がテレビの画面を通じて瞬時のうちに知りうる時代です。新聞もなかった昔なら人の口から口を通じておそろく何ヶ月も、あるいは何年もかかって、しかも誤り伝えられた形でしか知ることのできなかったことがらも、今では一時間とかからぬうちにラジオやテレビを通じて正しく伝えられるのです。

現代のわれわれは「A」物知りです。いろいろのことからについて「知らされ」ています。知識の量からいえば、現代人はおそらく過去のいかなる時代のひとよりも多くのものを持っているといえましょう。

このようにわれわれが多くのことを「知って」いるならば、一見すると、現代われわれは最もよく「考える」こともできるように思われるかもしれませんが。しかし「知る」と「考える」とは決して同じではありません。

「B」多くの正しい知識を持つということは正しく考え、正しい判断を下すために有利なことであることはいうまでもありません。誤った知識を基礎にして打ちたてられた判断は当然誤っているからです。「C」多くの知識を持つていたからといって、そこからただちに、正しく考えることができるようになることは導かれてきません。

「D」われわれは多くのことを知ることができるということによって、かえって考えることを忘れてしまうという危険もあるといわねばなりません。「E」われわれは知ることがあまりに多いため、知ろうとする努力に追いまくられて、深く考えないというシユウカンに陥ってしまうおそれもあるからです。

《2》ドイツの哲学者ハイデッガーは、人間は日常「ひと」の立場に立っているといっています。「ひと」の立場とは、自分自身の本来の立場を見失って、ただ「ひと」がするから、自分もする、「ひと」がそう考えるから、自分もそう考える」というように、きわめて簡単に付和雷同的な態度を取る立場です。この場合「ひと」とは決して特定の人をさすものではありません。それは世人一般であり、ただ一般に世の中のひとひとのことです。つまり「ひと」の立場に立つということは、自分自身の確固たる考えを持たず、世人一般の考えにわけもなく同調し、世人のするのと同様の行動を行なう立場です。

このようにわれわれが「ひと」の立場に陥りやすいことは、ハイデッガーもいうように、流行とか好奇心というような現象を見れば、さらにいっそうよくナットクされるでしょう。流行とはまことにふしぎなものです。流行にしたがわねばならない理由はもとより少しも存在しません。しかしそれにもかかわらず、世人は、ただそれが流行であるからという理由で、流行を追います。それは「ひと」がするから自分もする、ということにはかなりません。しかもこの流行という現象は現代はとくにいちじるしいのではないのでしょうか。近頃は女性はもちろん、男性まで流行のスタイルを追うようになっています。うしろから頭だけ見ると、女性と区別できないような男性の長髪など、まったく単なる流行というほかはありません。しかも多くの男性は、「ひと」がするからという理由で、この流行のスタイルを追っているのです。

好奇心というのも本質的に流行と同じ現象だといえましょう。それは、みずからは単なる「ひと」の立場に立つて新奇なものを追い求め、それにまったく末梢的な興味を抱くという態度です。自分自身で確固たる考えもなく、ただ世人とともに動き、つまらないことを知ることに関心を抱くのです。それはやじ馬根性であり、やじ馬とは自己を見失った「ひと」の立場に立つ群集であるといえることができます。

人間はだれでも好奇心を持っています。しかしこの好奇心という現象も、近頃はいよいよその度を増しているといえましょう。個人のプライバシーに関するような噂話がシユウカンシなどで次から次へと取りあげられ、いやが上にもひとひとの好奇心を誘います。ひととはそうした噂話などに興味を持って、「考える」ことを忘れた「ひと」の立場に追いやられてゆきます。

このように現代、流行とか好奇心というような現象がいよいよその度を加えているということも、①ということと無関係ではないといえるでしょう。マスコミの発達によって流行はたちまち全世界にひろがり、噂話もひろまっ

てゆきます。そしてこれによってわれわれはともすれば流行に対する関心をかりたてられ、好奇心を誘われて、いよいよ「ひと」の立場に陥りやすくなってゆきます。本来的な自己を見失い、みずから「考える」ことを忘れてゆきます。

もとより流行とか好奇心というようなことは、極端な例かもしれませんが。情報時代にわれわれに情報として与えられるのは、流行とか噂話のみではありません。そこには、さきにも述べたとおり、科学的知識とか政治的ニュースというような、もつと重大な情報^ケが伝えられます。しかしこの種の情報がいかに重要なものであっても、その情報^コの量の増大はわれわれをその応接^aにいとまなくさせる傾向^{けいこう}を持つのではないのでしょうか。われわれは情報に振り回されて、おちついて考える余裕^{よゆう}を持たなくなってしまうのではないのでしょうか。「知る」ことの量の増大はかえって「考える」ことの喪失^{そうしつ}につながるおそれがあるといわねばなりません。

《3》しかし ① でもつと危険なのは、他人の「考えた」ことが情報としてあまりにも多く伝えられるということであるかもしれません。われわれは他人の考えたことを「知って」しまいます。そうすると、われわれは他人の意見³を「知る」ことによつて、みずから「考えた」ような気になってしまふのではないのでしょうか。まして多くの人の同じような意見が数多く伝えられると、われわれは実際には何もみずから考えていないのに、その意見を自分の考えた意見のように思いこんでしまうのではないのでしょうか。

たとえば今の小学生はホーム・ルームなどの訓練によつて、いろいろのことがらについて自分の意見を發表できるよになつています。おそらくこの点では昔の小学生に比べて現在の小学生は格段の進歩を遂^とげているといえるでしょう。しかし自分の意見をものおせずに發表できるということはたしかに優れたことですが、まだ必ずしも自分で考え、自分で判断しているということの意味するものではありません。小学生はよく意見を發表するけれども、その意見は先生や世間の大人たちの意見そのまま、② 的だということがときどきいわれますが、もしそうだとすれば、小学生たちは他人の判断をただ知っているだけだといわねばなりません。

もとより小学生に対して自分で考えることを求めるのは元来無理なことでしょう。われわれは小学生に対してそこまで要求することはできませんし、小学生が意見をはつきり發表できるということはたいしたことす。しかし、もしも小学生が I ことを II ことだと錯覚^{さくかく}するとすれば、それはある意味でかえって危険であるといわねばならないでしょう。こういう小学生は長ずるに及^{およ}んでも、他人の考えを「知る」ことで満足し、「考える」ことをしなくなるおそれがあるからです。そして實際現在の若い人たちはそういう傾向を持っているのではないかと思われま。自分でよく考えるのではなく、むしろ有力な他人の考えにムード^E的に安易^{あんい}に同調してしまい、しかも自分ではみずから考えているかのように思いこんでいる人たちが多いのではないのでしょうか。

《4》このように情報時代は情報^{注3はんらん}の氾濫^{はんらん}によつて、かえって「考える」ことをおしつぶしてしまう傾向を持っています。さらに危険なのは社会全体がこのような傾向^bを是認^{しにん}してしまふようになるということです。「知る」ことのみを重要として、「考える」ことを抽象^{ちゆうしょう}的^Fとして退^ひけてしまふということです。このような風潮は実証主義的風潮と称することができましよう。経験的に確かめられる事実のみを重んずるのが実証主義ですが、こうした実証主義的風潮がひろま^つつてゆくと、どうしても「知る」ことにのみ重点が置かれてしまします。現代の社会はまさにこういう傾向を示しているのではないのでしょうか。

もとより私は経験的な事実を重んじることがいけないというわけではありません。われわれは事実を無視して勝手に「考える」わけにはゆきません。しかし事実を「知り」さえすれば、それで万事が解決されるのだと考えるならば、それは大きな誤りです。事実を「知った」上で、さらにわれわれは「考え」ねばなりません。あまりにも実証主義的な態度は「考える」ことを軽視^{けいし}してしまうのではないのでしょうか。現代の実証主義的風潮は社会全体にこういう誤りをひろめているのではないかと思うのです。

(岩崎武雄『正しく考えるために』)

注1 「月世界での宇宙飛行士の活動」：一九六九年、人類が初めて月面に到達して行った一連の活動

注2 「ハイデッガー」：一八八九―一九七六年。この文章が發表されたときには存命していた

注3 「氾濫」：あふれること

問1 — 線A「導かれて」、E「安易」、F「退けて」の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

問2 — 線B「シュウカン」、C「ナットク」、D「シュウカンシ」のカタカナを漢字に直しなさい。

問3 — 線a「いとまなくさせる」、b「是認してしまう」の意味としてもっともふさわしいものをそれぞれ次のア～オから選び、記号で答えなさい。

a 「いとまなくさせる」

ア かかりきりにさせる

イ 前向きにさせる

ウ 途方に暮れさせる

エ 関心を抱かせる

オ 不安感を持たせる

b 「是認してしまう」

ア 何となく見過ごしてしまう

イ 悪いことでも見のがしてしまう

ウ 良いものだと判断してしまう

エ 許せないと反発してしまう

オ 仕方がないとあきらめてしまう

問4 「A」「E」に入るのにもっともふさわしいことばを次のア～ケからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア すると

イ すなわち

ウ もとより

エ なぜなら

オ しかし

カ むしろ

キ しかも

ク いささか

ケ たしかに

問5 — 線1「自分自身の本来の立場を見失って」とあるが、「本来の立場を見失」わないためには何が必要か。本文中の——線ア～コからふさわしいものをすべて選び、記号で答えなさい。

問6 — 線2「付和雷同」と同じような意味のことばとしてもっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 柳に風

イ 鹿を追う者は山を見ず

ウ 鰯の頭も信心から

エ 尻馬に乗る

オ 人のふんどしで相撲を取る

問7 《2》には次の一文がぬけている。次の一文が入る直前の五字をぬき出しなさい（句読点等の記号は含まない）。
自分自身が平均的な世人一般の立場に埋没してしまふ立場です。

問8 ①に共通して入るもつともふさわしいことばを《1》から五字以内でぬき出しなさい。

問9 — 線3「われわれは他人の意見を『知る』ことによって、みずから『考えた』ような気になってしまふ」とあるが、それを防ぐために必要なことは何か。もつともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。
ア 他人が何か自分に伝えようとしているときに、相手の経験の有無によって、その意見に従うべきなのか従うべきではないのかを判断すること。

イ 自分を心配し大切に思ってくれている相手の意見であつたとしても、そのまま無批判には聞き入れず、自分の考えを保つこと。

ウ 自分の意見について他人から批判されたときに、その批判を支持する人が少なければ、自分の意見を最後まで信じて主張すること。

エ 自分と他人とは異なる考え方をして当然なので、まずは相手の意見に耳を傾け、自分の意見を押しつけないようにすること。

オ 他人の意見を認めることは価値のあることなので、自分の意見が正しいと確信していても、相手から何か忠告されたときには素直に受け入れること。

問10

②

に入るのにもっともふさわしいことばを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 理想

イ 画一

ウ 合理

エ 現実

オ 恒常こうじょう

問11

I

II

に入るのにもっともふさわしいことばを本文中からそれぞれ五字以上七字以内でぬき出しなさい。

問12

筆者の考えとしてふさわしいものを次のア～クから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 流行は「ひと」の立場に立つ群衆の行動によって支えられているものであり、ただ「つまらないこと」に興味や関心を抱く好奇心とは性質が異なるものである。

イ 何か行動を決定するときには、自分が何をしたいかという自己の気持ちよりも、他人からどう思われるかという「ひと」の視点を重視するべきである。

ウ 現代の社会は、「経験的に確かめられる事実」を重んずる傾向があるが、その風潮が広まることのないように注意するべきである。

エ 現代の人々は、マスコミが発達し様々な情報を簡単にしかも短時間で「知る」ことができるようになり、より深く「考える」ようにもなった。

オ たくさんの知識を身につけることを重視し「考える」ことを「軽視」するようになってきたが、昔は「考える」ことを重視する考え方が主流であった。

カ 他人の考え方を「知る」ときに、昔は人づてに聞くしか方法がなかったので、そのたびにその情報を取り入れるかどうか判断することができていた。

キ 情報の氾濫による「知る」ことの量の増大は、本来的な自己を見失った「ひと」の立場に立つ群衆をも増大させる。

ク 自分自身の意見を持っていなくても、自分なりの生き方をしていくためには、皆が認める「有力な他人の考え」に近づくことが大事である。

〔以下 余白〕